

大正四年六月二十一日第三種郵便物認可 (惟正一同一日發行)

會學濟經學大國帝都京

叢論經濟

號一第 卷三十二第

行發日一月七年五十大

論叢

効用、價值及び價格九州帝國大學 教授 文學博士 高田 保馬

資本利子税と地方附加税教授 法學博士 神戸 正雄

ツエツコ・共和国の土地制度改革教授 法學博士 河田 嗣郎

スロヅアキア教授 法學博士 末川 博

一九二二年のロシア勞働法助教授法學士 末川 博

我國財政の季節的變動助教授法學士 沙見 三郎

我國の國際貸借と金解禁問題法學士 井上準之助

說苑

誤れる植民政策の畸形兒・琉球教授 法學博士 山本美越乃

足袋の製造工程法學士 本多 芳郎

雜錄

貧富調節論教授經濟學博士 木庄榮治郎

天台宗團の財政經濟學士 中川與之助

經濟學會大會記事

法 令

清涼飲料税法・織物消費税法中改正・地方税に關する法律・健康保險特別會計法・農業者庫法中改正・輸出生絲検査法・郵便年金法・製鐵業獎勵法

(禁轉載)

經濟論叢

第二十三卷 第一號

(通卷第百零拾卷號)

大正十五年七月發行

論

叢

効用、價值及び價格

高田保馬

大正のはじめ、經濟學讀書會の成立する少しまで、濶學士を中心とする研究者の一派は京都大學の經濟科の諸教授を以て、戸田博士河上博士の指導の下に價值論を研究してゐた。その間に隨分はげしい議論のたゞかはされたのを未だに記憶してゐる。當年の濶學士の價值論的思想は不斷私との議論の間に構成せられたものであるだけに、私自身の頭になほしみこんでゐる。同學士今政界に去れる時、私はその學界に残せる遺業を自分で出来る程度までに仕上げようと思ふのである。たゞ遺憾なることは戸田博士既に亡く、河上博士の思想亦著しく變化して當年の其思想の所有者にあらず、従ひてかゝる見解に對し、殆ど感興を有せられないであらうと思はるゝ點である。(やがて私はこれを土臺にして價格の説明を發表したいと思つてゐる)

——一九二六、五、一七、朝記

一 概説——自己の主張

私は經濟行爲を以て有價的獲得の行爲であると見、從ひて經濟財を以て有價的獲得の對象であると見る。このことは今詳論をさけたいと思ふ。さて經濟財は有價的獲得の對象であるとして、それは何故に有價的に獲得せらるゝか。これは今明にせらるべき問題である。

第一、効用。經濟財たる第一の條件は効用を有することである。効用とはあるものが吾人の欲望を満足せしめ得る性質である。このものは私が別に論述したるが如く(經濟研究本年四月號)使用可能又は物能である。物能とは何等かの作用を吾人に與へ得る性質である。このものと云ふは前述の如く使用可能又は物能である、物能とは何等かの作用を吾人に與へ得る性質を云ひ、効用とは物能が吾人に作用するが故に欲求せらるゝ性質を云ふ。かくて効用はまた、適欲性 *optative* とも稱せられる。或る場合にはこの効用が使用價值と稱せられてゐた。効用の根原は吾人の欲望にあり、あるものが吾人の欲望(それは如何なる種類のものであるを問はず)を満足せしめうる時に欲求せられ、そこに効用が成立する。欲望は太陽の光線の如く、効用はこれによりて生ずる物の色の如し。物なければ色見えざれども太陽なければ色生れず。ものは効用を有する時に財となる。然れども財は必ずしも代償を拂ひて獲得せらるゝを要せず、呼吸用の空氣、飲料の水

の如し。經濟財たるが爲には他の條件を具ふるを要する。

第二、獲得の困難。

獲得の困難（又は調達の障礙 *Beschaffungswiderstand*）の伴ふことが經濟財たるに要する第二の、而も決定的なる條件である。効用あるも獲得の自由なるものは自由財に過ぎず。その獲得の困難なる場合は多少の代償又は犠牲が拂はなければならぬ。此條件の具はる時に、財は有償的獲得の對象となる。而して獲得の困難の存在及びその程度は全然獲得せむとする主體の意志を離れて客觀的に決定せらるゝものである。此困難は一、自然的なるか、二、社會的である、たゞ此社會的なるは多くは自然的なるもの、反映である。自然的なる困難は存在量の稀少なるか、又は新に生産する技術の困難なる點に存する。これは主體が自然との交渉によりて自ら獲得せむとする場合に遭遇する困難である。社會的なる困難は財の所有者が之を讓渡せむとするものに與ふる所の障礙である。これは大抵自然的困難に比例すれども、全くこれと獨立なることもある。この獨立なる社會的困難、たとへば温泉が五里四方に亘りて無限に湧出すところ、たゞ一人が之を獨占する時、住民が湯錢を出して入浴するとせよ。此入浴の困難は全く社會的のものにして、何等財の稀少性と相關せず。空氣の獨占せられて人々に呼吸料金の要求せらるゝ場合も亦同様である。學者によりては茲に云ふところの獲得の困難を稱して稀少性となすが、此名稱は其實當らず、たゞ傳統的なる用語として便宜上之を用ふるを妨げざるのみ。

要するに、効用なくば獲得の欲求生せず、此欲求あるも困難なくば代償を拂ふを要せず、効用ありて且つ獲得の困難なる時に代償を拂ひて財を獲得する。この時、その財は經濟財となる。

經濟財はすべての財と同じく價值を伴ふ。而もこの價值は經濟財にのみ特有なるもの、故に名づけて經濟價值と云ふ。經濟價值はある財の所有(即ち獲得してゐる状態、これを獲得と云ひかふるもよし)が代償を免れさせるゆゑのありがたさである。私共は種々なる精神的身體的乃至社會關係的(友人を求め名譽を求むるが如き)欲望を有する。此欲望に役立つか否かによりて種々なるものはそれぞれの効用をもつ。然れども、此効用を享受して自分のものとなす爲には、自ら其財を獲得しなければならぬ。その財の獲得又は所有そのことにかゝる第一の價值がある。それはその財の所有を失へばかの効用の享受も亦失はれる、効用を盡けるものたらしめず、自分のものとなすや否やは此財の所有にかゝる。茲に於て、その財の所有にはそれによりて得られる効用ゆゑのありがたさがある。之を其財の所有に基く價值又は使用することに基く價值と云ふ意味にて、所有價值又は使用價值と云ふ。進みて考ふるに、その所有にかゝる第二の價值がある。かの財の獲得には犠牲を有する、かゝる犠牲を免れたいと云ふ欲望は人の皆抱く所である。あるものを所有してゐると、此獲得のための犠牲を拂はずに濟む。この効用に基いてありがたさが覺えられる。これを假に稱して免償價值と云ふ。所有と云ふことを中心として考ふるに、前者は積極的

の價值である、それは即ち一財の所有によりて與へらるゝ効用の享受に基くものに外ならぬ。後者は消極的の價值である。それは一財の所有によりて確保せらるゝ犠牲の免除に基くものに外ならぬ。

併しながら一步を進めて考へたい。財の所有が伴ふ此二の價值——所有價值又は使用價值 *Bystwert, Gebrauchswert* と免償價值 *Von-Kosten-Befreiungswert*——の中、何れが終局に於て其財の所有の價值と考へられるか。私は免償價值であると思ふ。何となれば、一財が所有の範圍より取去らるゝとしても之によりて生ずる損失は幾何なるか、一定の犠牲によりて再び獲得せらるゝならば、それは此犠牲の大きさなりと云はなければならぬ。従ひて其財の所有に依存し之に伴ふまことのありがたさはそれによりて獲得の犠牲が省かれてあるゆゑの價值であると云ふに止まる。即ちたゞ免償價值だけである。而して一の財が經濟財たる所以はそれが有償的獲得の對象たる點に存する、所有せられむと求めらるゝ所以はその所有が價值を伴ふが故に外ならぬ。而も其所有の伴ふまことの價值は免償價值である。然る以上は、免償價值即ちこれ經濟價值である。

免償價值の大きさを決定するものは犠牲の大きさ従つて獲得の困難と云ふ客觀的事情そのものである。然れども、この價值そのものは主體の抱くありがたさに存するが故に、それは主觀的なる價值なりと云はなければならぬ。進みて考ふるに、此價值がある一定の犠牲の代りとしての價值で

ある。即ち費用を體化し又は代表せる限りの價值即ち費用代表價值である。此點からそれを主觀的費用價值であるを見るを妨げぬ。更にまた、此免償價值は一定の財の所有が犠牲を免れしむるゆゑの價值なるが故に、それは必然的に相對的のものである、價值の大きさは犠牲の大きさを以て考へられる、A財aの免償價值はその費用B財bだけであるを見る、このことが $A_a = B_b$ の式を以て示され得る。今日の貨幣經濟の組織にありては常に犠牲Bが貨幣を以て考へられその大きさは貨幣の量bとして認められる。

此經濟價值に就いて述ぶべき詳細の點はなほ後に附言することとして、私は更に進みて價格の意義を説明したいと思ふ。

價值は一經濟主體内に於ける主觀的見積りであるが價格はこれと異なり、客觀的事實として成立するもの、一財の一定數量に對して交換せらるゝ他財の數量である。例へば一定の市場に於て米一升が麥二升と一般的に交換せられたりとするれば米一升の價格は麥二升である。然れども貨幣經濟の組織にありては此交換せらるゝ他財が常に貨幣として考へられ、從ひて一定財の價格は常に貨幣の一定數量であることとなる。普通にある財又は富又は財産の貨幣價值如何と云ふ言葉があるが、これはそれを貨幣にて見積りたる經濟價值如何と云ふことにして、豫想せられたる價格とも見られべきものである。云はゞ潜在的なる姿に於ける價格である、事實に於て賣買せら

れざる以上、價格が成立したりと云ひ難い。

價格は賣買の間に成立する、それは賣買の當事者双方の主張の合成物として決定せらるゝものである。双方の主張は一に授受せらるゝ財の免償價值に従つて形成せられる。かるが故に、價格を決定するものは免償價值なりと云ひ得る。今廣大なる市場を考ふる代りに、事柄の筋を極めて簡明ならしむる爲、たゞ一人宛の賣手買手を考へよう。甲は財Aを五圓に賣らむとしては之を三圓ならば買はむとする。財Aの甲にとりての使用價值は零である、彼が今日の制度に於ける分業的生産者である限りは。彼は乙に對して少くもA財の免償價值だけの大きさの貨幣額二圓を要求する。たゞ若し出來得べくば過大の利益を得て五圓に賣らむとするのみ。乙は若し此財を自ら作らむとするならば或は五十圓を要するか、又は全然作り得ないであらう。従ひて此點からすれば其見積る免償價值は五十圓又はそれ以上である。然れども、彼が甲以外の人から三圓を以て買ひうるぞ知るならば、其見積る免償價值は三圓をこえることはない。たゞ安く買取らむが爲に二圓ならば買はむと云ふのみ。この時、兩方の掛引により價格は二圓と三圓との間に定まる。此時各自の要求の基礎をなしてゐるものはたゞ免償價值あるのみ。乙はもとより使用價值を認めなければ買はぬ、然れども、それは買ふための前提たるに止まり、彼をして三圓まで提供せしむるもの、一にその免償價值にある。

從來久しく價值を使用價值と交換價值との二に分つのを普通としてゐる。このうち、使用價值は私がさきに所有價值と同視したるものである、その大きはその財の所有によりて所有者に與へらるゝ、効用の大きさにより決定せらる。交換價值に至りては其意義必ずしも一ではない。普通はこれに客觀的なる意義を與へる。それは客觀的交換價值、國民經濟的交換價值 (objektiver Tauschwert, volkswirtschaftlicher Tauschwert) 等と稱せらるゝ、意味するところは一の財の他財購買力、他財支配力にある。従ひてそれは價格の事實を反面から見たるものに外ならぬ。然れども價值は明に主觀的のものである、その限り客觀的交換價值と云ふものは存立しないと云はなければならぬ。また交換價值は主觀的交換價值として考へられる。これは普通一財が交換と云ふ道行を介して與へべき他財の價值と見られてゐる、それは他財の使用價值に外ならずと思はれる。即ち一財が交換と云ふ使用の道行によりて與ふる効用のゆるぎの價值、即ちある種の使用價值に外ならぬ。然れども、私は若し交換價值の概念を意味多きものであらせる爲には、之をある使用價值とは別なるものと見なければなるまいと思ふ。私は經濟價值即ち經濟財に特有なる價值を以て使用價值にあらず、たゞ免償價值にありと見る。であるから、交換價值の概念も亦此免償價值を中心として形成したいと思ふ。かく見れば、自己のA財を以て交換せむとするB財の自己に對して有する免償價值がこれ主觀的交換價值に外ならぬ。即ち、交換によりて得らるべき財の自己に對し

て有する免償價值である。勿論交換し終れる時に於ては其財の免償價值たる、たゞA財のそれに過ぎぬであらう。たゞ交換せむとする時に當り、此交換の方法以外に於ては如何なる犠牲を以てその財の獲得せらるべきか、從ひて其財の(當該交換外の)免償價值如何を考へる、その免償價值が即ち交換によりて新に獲得せらるべき免償價值である。かくて他の立場からは、一財の主觀的交換價值とは其財との交換に於て獲得せらるべき他財の自己に對して有する使用價值であるに對し、私の立場からは、同じく交換によりて獲得せらるべき他財の自己にとりての免償價值である。

二 異見の 一 一

私は進みて、これらの點に關する異見の一二を考へてみたいと思ふ。

經濟價值(又は單に價值)を以て相對的なるものであるとなしたが、此點に就いては異論がある。それは價值を飽まで絶對的のものとなすのである。例へば此價值の本質を以て勞働にありとなすにしても、又は限界効用(又はこれに基く大切さ)にありとなすにしても、それらは價值を絶對的のものであると見るのである。而して此の如き見解の上に立ちて見るならば經濟價值が相對的のものであるかの如くに思はるゝのはそれは或る財の價值を他の財の價值に比較して云ひ表は

すため、價值そのものが相對的であるのではない。例へば馬二頭の價值は牛一頭であると云ふのは馬二頭の價值の絶對的の大きさを a とすれば牛一頭のそれも等しく a であることを示すに外ならぬ。かう云ふのがその見解である。然れども、經濟價值を免償價值即ち費用を省きうるのうちとすれば、財Aの價值は常に何等かの他財Bだけのものであると云ふこととなり、AとBとの比例をばそれ自體のうちに包含するより外はない。財Bを離れてAの免償價值を考へることは絶對に不可能である。たゞ財Aの價值が財Bだけのものであると云ふとき、この財Bだけと云ふことの意味如何は別に考察せらるべき問題である。

價值を以て絶對的のものとなす見方に就いても二の立場があり得る。一は價格の背後に潜み、それが實現して價格となる所の本質又は實體と見るものである。此立場から云へば、價格がかゝる絶對的價值の實現に外ならざるが故に、前者の大きさが後者の大きさから外るゝことはあるにしても究極のところ之に落ち付かむとするものである。然れども此考方は一の形而上學的のものに過ぎず、何等論證し得べき經驗科學的のものではなし。價格の背後にかゝる價值の存するや否やは知り得べからざる事柄である。二は、かの絶對的價值が交換者によりて認められ、延いて彼等の間に掛け引きが行はれる。其結果、價格が彼等の間に成立するとなす。云はゞかゝる價值と價格との關係を以て目的手段の連鎖によりてつながるもの、又は因果によりてつながるものと見なす。

略言すれば價格は價值のある意味に於ける結果である。私も此點のみは正當であると考へる。たゞ價值そのものを以て相對的なりとなす點に於て見解の相違を見るのみ(一)。

(一) 免償價值又は費用を省きうる價值としての經濟價值が相對的であると云ふことに關しては、多少なほ考ふべき點がある。果して免償價值は全く他の財との關係に於てのみ、云はゞ相對的にのみ考へらるべきであらうか。一般に獲得のためにする費用を省き得る價值として考へ、たゞ此費用の省かるゝ程度又は度合として他の財が引き合ひに出さるゝ性質のものでなからうか。私はこれを全く否定するわけには行かぬやうに思ふ。たゞ姑く、本文の如くに記すに止める。

さて、價值を以て價格を決定する或意味の原因であると見る考の中、最も注目すべきは前者を使用價值と見るものである。古來價值に使用價值、交換價值の二を區分する見解は久しく認められ來つた。而も、後者を以て他財支配力となし、一財を以て獲得せらるゝ他財の大きさとなすものは多い。かく見ればそれは事實に於て價格そのものに外ならぬ。而して、これが構成は使用價值によりて説明せらるゝを常とする。たゞこの使用價值と云ふは前に述べたる所有價值の意味にして、事物の全部効用を指すに非ず。所有する人々の効用享受がどれだけ其財の任意の一單位に依存するか、それに基づいて認めらるゝ價值である。云はゞ限界効用を意味するに外ならぬ。然らば價格の構成に對して此意味の使用價值が決定的作用を營み得るや如何。

使用價值によりて價格を説明する企に對しては有力なる一の反對説がある。それは主觀的なる

使用價值よりして客觀的なる價格が如何にして説明せらるゝか、主觀的なるものは如何に集合し又は分拆するも主觀的なる範圍を出でず、これより客觀的なるものへの移り行きは不可能であると云ふのである。然れども、これは表現の表面に拘はれる見方であると思ふ。價值は主觀的なりと云ふけれども、これは個人内部の事柄であると云ふに止まる、それは考察者にとりては價格と等しく客觀的事實である、價值より價格を説明するは客觀的なるものを以て客觀的なるものを説くに外ならぬ、その移り行きに於て不可能なるべき道理はない。或は進みて、使用價值が全く個人的の事象であり價格が社會的の事象である點からして、一方より他方を説明することの不可能を説き、このことをまた、主觀的なるものから客觀的のものを説きうべからずと云ひ現はすものもある。然れども各個人が個人的動機に動かされて個人的作用を營むところに社會的なる事象の成立することは餘りに屢眼前に展開せられつゝある事實ではないか。種々なる組合然り、株式會社然り。たゞ價格の場合にのみ、社會的なるものが個人的なるものゝ綜合によりて構成せられずと云ふ道理はない。この主張が價格の構成に於て超個人的のものゝ參加せずと云ふことを意味せざるの勿論である。

然れども、たゞ價格が使用價值によりて決定せられると云ふ一段に至りては首肯し難い。私は使用價值が價格にとりて何等の作用を及ぼさずと云ふのではない、けれどもそれは免價價值を通

しての間接作用である、價格を直接に決定するものは免償價值にして、使用價值はたゞ此免償價值の到達しうる大きさの限度を定むるのみ。この事を簡單なる例に就いて述べたいと思ふ。勿論こゝには價格構成の市場的過程を叙述しようとするのではない、それは別に試みらるべき仕事である。こゝにはたゞ二人の間の賣買の事實として前例を考へてみたい。

使用價值(Aの)

免償價值(Aの)

甲(買手)

零

二圓

乙(買手)

一〇〇圓(此點については評論を要するがそれは後の機會に)

三圓(他より買ふ場合)
五〇圓(自ら生産する場合)

買手乙が若し他より三圓にて買入れ得る可能性があるならば、彼は決して其使用價值百圓までを支拂ふことはしないであらう。買入れ得ずとしても、自ら五十圓の生産費を以て生産しうるならば五十圓以上を拂はない。この三圓、五十圓はそれぞれ乙の見積る免償價值である。勿論今日の分業的生産者の場合にありては乙が自ら生産する可能も殆どなく、又價格が市場に於て決定せらるゝ時、乙は別に買入るゝ機會を有することも稀であらう。此時免償價值は如何にして決定せらるゝか。それはこれ丈ならば必ず入手し得らるべしと云ふ見積りの價格によりて定まる。而もその高さは使用價值の高さ百圓を越し得ない。甲乙二人だけの場合にありて、若し甲が五圓の云ひ値をする時は、乙は五圓出せば必ずAが手に入ると思ふ、この時Aの乙にとりての免償價值は五圓

となる譯である。普通の市場にありて、乙の免償價值を決定するものは過去の相場による見積りにして、これを土臺となしながらあるつけ値をして賣手と掛引をする。掛引の結果はこれと甲の免償價值とのある點に於て定まる。此際、免償價值の大きさは明確に定まらぬけれども、價格の達しうる上限が使用價值に非ずして、多くは更に低き免償價值であることは直觀的に明白である。如何に自分にとりて有用なる財にして萬金を投じてほしいと云ふものであつても、百圓で得られる見込がついてゐるならば、これ以上に支拂はざることとは自明の理である。畢竟、買手にとりての獲得の犠牲の確實なる見込以上に價格の高い譯はない。

此の如く見來れば、賣買の價格を直接に決定するものは免償價值にして使用價值ではない、免償價值が經濟價值と稱せられ得る理由は一方また此點にある。先づ賣手の側に就いて見るに、彼は今日の分業組織に於ける商品生産者である限り、自ら其所有財に見積るところの使用價值は零であるのを原則とする。従ひて、彼が其財を提供し得る最低價格は一に免償價值に於て定まるものと見なければならぬ。乙に就いて見れば事態少しく異なる。彼は其見積る使用價值によりて買手となるものである。而して普通に、彼の支拂ひ得る最高の價格は使用價值に本いて定まると考へられてゐる。然れども、彼が免償價值を以て使用價值よりも低き高であると認めたる以上は、それ以上を支拂はざること前述の如くである。従ひて、事實に於て成立する所の價格の限界をな

すどころのものゝは免償價值にして使用價值ではない。たゞ使用價值が前述の如く免償價值の到達しうる最高限度を劃することを認めなければならぬ。更に進みて考ふるに、彼が其財の免償價值を一定のものゝと認めたる上にて、買手たる地位に立つや否や、又其財の幾單位を買はむと欲するやに關しても亦、其使用價值が決定的なる意義をもつものと思ふ(以下四項未定稿)。

茲に於て問題は進轉する。私が茲に免償價值と云ふものゝ内容如何。この點に關しては、使用價值によりて價格を説明せむとするもの、即ち限界効用説に立つものは云ふであらう。一財の免償價值は一種の費用價值である、即ち一定の費用を免れうる故の價值である。然れども此免れべき費用の大きさは何によりて定まるか。それは第一、犠牲として役立つ財の効用ではないか。第二、然らずして他財即ち費用財を獲得するに要する費用によりて、即ち他財の免償價值によりて定まると云ふならば、それは究極循環的説明法に終るのではないか。即ちAの免償價值はAを獲得するに要するBの免償價值により、BのそれはCのそれにより、順次に進みてYのそれはZのそれにより、而してZの價值はAの價值によりて定まるとなすべきではないか。

財Aの免償價值の大きさは財Bであると云ふ。此意味は如何なる意味か。財Bの物質がこの價值の大きさである譯はない。此物質をして經濟財たらしむるもの、即ち財Bの有する免償價值が犠牲即ち費用の内容をなし又Aの免償價值の大きさを決定するものであると思ふ。反對の立場の人は財

Bが費用として意味する内容はその有する使用價值（詳言すれば、Aの獲得に用ふる以外の最も有利なる使用方法に於ける使用價值）即ち限界効用であると云ふ。併しながら財Bが常に必ず財Cによりて得らるゝならば、財Bを失ふことによりて失はるゝものはたゞ財Cに止まる譯である。而して財Bの使用價值そのものではない筈である。これは限界効用説の根本理論たる代替の原則から來る當然の結論である。之を否定するならば、限界効用説自らもまた覆へる。此點から考ふれば、財Bを犠牲とすることはその有する免償價值を犠牲とすることに止まる。然れども茲に於てか、此説明の仕方は究極循環的説明に終らざるやの問題が伴ふ。

私はこれに就いて次の如くに考へる。よし説明が循環的であるにしても、若し他に説明の仕方がなく、一財の免償價值は結局他財の免償價值による外定まる道がないとすれば、それは已を得ざる循環的説明である。有限なる知性の能力を以てしては循環的説明も已を得ざる時があり、已を得ざる時にはこれを以て満足しなければならぬ、それはなさざるに勝る、何物をかを教ふる知識である。此場合にありても各財の價值相互の關係及び其變動はこれによりて明にせられ、從ひて價格の變動の道行はこれによりて説明せられうる。

然れども、私は此種の循環的説明を以て免償價值説の必然なる結末であるとしたくない。財Aの免償價值は費用たる財Bの免償價值によりて定まる、財Bのそれは財Cのそれによりて定ま

る。而も此道行のある點に於て、費用たる財Xの免償價值が其獲得の費用を以て決定せられざる場合の存し得ないか。Xがその所有者にとりては他の費用を以て獲得せられず、従ひて他の財の免償價值がXのそれを決定し得ぬ場合がありはしないか。私はこれを肯定する。A = B; B = C; C = D; ……の進行がXを以て止まるを見る。即ち、Xの免償價值の内容が、Xの所有者のXを獲得するに拂ふべき費用を以て定まらざることを見る。此財Xは即ち勞働である。而して勞働の免償價值はこれを生産する費用即ち獲得の費用によりて決定せられずして、寧ろ勞働が要求し得るところのものを以て定まる、蓋し勞働の所有者は其所有によりて此要求しうるだけの費用を省き得るからである。此要求し得るものは畢竟勞働者の所得即ち勞銀に外ならぬ。かくて、勞働の免償價值は勞銀によりて定まる、而してそれ自體、他のすべての免償價值を決定する（以上四項未定項）

他の立場からは、免償價值を決定する費用の内容を以て勞働そのものであるとする。然れども、勞働そのもの、苦痛困難に着眼してこれを費用の内容と見るものありとすれば、其主張は當らず。勞働と若痛との結合は偶然的にして必然的ではない。従ひて此見地からは勞働を以て必ずしも費用であるとは見がたい。進みてまた勞働そのものを價値の實質とする者もあり得る。財AがBだけの勞働を要したりとすれば、Aの所有はBの勞働だけの價値を省きうるわけとなる。然

れども、財の所有によりて省き得る所の費用は思ふに、決してこれに投せられたる勞働の分量によりて決定せられるのではない。私共はそれが勞働の免償價值そのものによりて決定せられるのを知る。即ち同一量の勞働量を要したるものにも、支拂はる勞銀の多少によりて、財Aの有する免償價值は異なつてゐる。この點別に詳論したいと思ふ。

なほ勞働に就いて、次のことを附言したい。經濟生活は一方面から見ても、財の生滅の過程の全體である。従ひて、其生産の過程の出發點である勞働はまた經濟生活全體の出發點をなす。これから推して次のことを知り得る。勞働の免償價值の内容たる勞銀は一切の經濟價值構成の出發點をなすものである。而もその大きさは他の費用によりて決定せられずして、それ自體自ら變動しゆく所の性質、即ち自動性を有する。勿論この變動は重に經濟外的因子の作用によりて決定せられるが、經濟理論の構成に當りてはかゝる因子の作用を「他の一樣なる條件」と云ふ中に入れて別に顧慮しない。然れども、勞銀の自動性そのものはこれを認めて、これに相當の意義を認めなければならぬ。

勞働の數量又は時間にあらずして勞働の價值こそは經濟生活の樞軸をなす。この點についてはなほ詳論を要する。

三 普通の價值觀念との比較

なほ、普通に用ひらるゝ經濟價値の觀念と上にのべたるものとの異同を茲に附記したいと思ふ。價値は(少くも經濟原論又は理論經濟學の取扱へる限りに於ては)すべて、ある欲望をみたすための大事さ、意義と見られてゐる。(これは價値即交換價値と見たる古典派を除き所謂現代的理論について云へば)。而して、欲望をみたす能力を効用と云ふときは價値は効用に基く、又は效用によりて定まる、又は效用そのものであるなど、稱せられる。此意味に於ける價値に種類價値又は抽象價値(Gattungswert, abstrakter Wert)と具體價値(konkreter Wert)とを分つ。水は渴をこめてくれる效用をもつものとして一般に之を大切なりとするときの價値は前者である、海上に於て一杯の淡水を大切にする時の價値は後者である。而して經濟學に於て取扱ふものはすべて後者にのみ屬する。此具體價値についてまた、種々なるものが分して考へられる。

從來交換價値と對立する使用價値の觀念がある。これには二のものが分ち得られると思ふ。或る場合には使用價値が前述の意味に於ける種類價値として考へてゐたでないかと思ふ。然れども、最多くの場合に於てそれは具體價値として考へられ、而もそれは一定の財がある特定の人に與ふる效用、即ち彼の欲望満足が此財の所有に依存する程度に依存するものと認められる。此の

如くに見れば、財の任意の一單位の使用價值は其限界効用に等しと云ふことになる。而して一般に財の主觀的價值と云ふは皆之をさす譯である。愛着價值(Affektionswert)と云ふのも亦之に當ると思ふ。主觀的價值又は使用價值の一種として主觀的交換價值が考へられる。甲財との交換によりて得られる乙財の使用價值を甲財の主觀的交換價值と云ふのである。つまり一財が交換と云ふ道行を通して與へらる効用に基く所の使用價值を云ふ。云はゞ間接的なる使用價值である。

價值を嚴密に解して、効用の故に有する大切さを見る限り、以上の外、經濟學が取扱ふべき價值はない筈である(假に限界効用説の立場に立つとして)。併しながら、經濟學の傳統にはなほ他の一の價值が認められてゐる。それは交換價值である、さきの主觀的交換價值と區別するため云へば客觀的交換價值である。これはむしろ、價值と云はざるをよしと思ふけれども、傳統的の用語法は致し方もない。このことは、ラテン系の言葉 value, valeur と云ふものが客觀的のある能力を意味する點に基くかと云ふ此意味の交換價值は又購買價值とも稱せられる。これは購買力と見れば誤なしと信ずる value in exchange (exchange value) = puissance d'acquisition (Passy) = the command which its possession gives over purchasable commodities in general (J. S. Mill) = the amount of that second thing which can be got (Marshall) —— 『實は一般に客觀的交換價值と云ふものはなご』。——此の如く見來れば、交換價值は廣義の價格である。そして、貨

- 1) Neumann, Grundlagen, Bd. I. S. 142, 195; 福田博士經濟學全集第一卷三三七頁
- 2) Wieser, Theorie der gesellschaftlichen Wirtschaft, S. 167.

幣で測られたる場合に、普通に云ふ價格が成立すると思ふ。其他國民經濟的價值と云ひ、價值(經濟的)そのものと云ふもの(volkswirtschaftlicher Tauschwert, Wert schlechthin)みなこれを指すに外ならぬ。

さて、私は自ら述べたる價值概念をばレキシスのそれに比較する時最も多くの興味を覺ゆるものである。その主觀的費用價值(subjektiver Kostenwert)は上に述べたる免償價值と極めて相近き内容を有するものである。『經濟を營む各人の、一定の財貨に對する主觀的費用價值はその財貨を獲得するに必要な貨幣費用によりて決定される。』費用を必ずしも貨幣費用とのみ見ず、又費さるべき費用に注目せずして、所有によりて費さるゝを要せざる費用に着目する時免償價值の概念が成立する。此點を離れて考ふれば着眼するところ全く相同じ。その所謂主觀的使用價值は費用價值の一種、最高の使用價值である。『使用價值とは其獲得の困難と對照して、一定の經濟財に認めたる、その效用の程度を意味する』一個若しくは一定量の財貨に對し、一定の狀況の下に於て認むべき最高の費用價值である。』その財貨の獲得の爲めに止むを得ず費すを要する極度の費用に基づく評價である。』此使用價值は其内容に於て、限界效用論者の使用價值に同じい。たゞこれを一種の費用價值と見る點に於て特有の色彩を見る。此見方に對して私は賛同を辭せざるものである。